

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄 「雲」	14
一首評 「そらよみ」	18
短歌で まちがいさがし	19
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	20
クロスワード	21
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	22
次回予告・編集後記	23

2024.
July

10

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

アザミだと確定できて嬉しくて含羞草だと勘違ひして
ミニクモが椅子の裾野で踊り出す踊り止めれば温存タイムか
足裏の蝉に驚き声上げる神社の木々にセミは鳴かない

雄と雌上昇しながら交尾する電柱の一番上で消失

痒いのを搔かずに我慢すればいい叩くのがいい手のひらなどで
大ムカデ公園で死すまだ動くオーラに満ちて木々のさやげり
田の鶯が不動であるのは好ましい動き出す時不吉に感じ



散歩

石川順一

ふと見せるまなざしすっと気になつて恋と呼ぶにはまだ拙くて
花屋とか流行りの店が目にとまり街ごと僕の後押しをする
ゆるやかな水族館の斜路をゆく離れてはまた戻るひだり手
記念日をすぐ作るきみと自転車で目抜き通りをふたり乗りして
遅番のバイトのシフト増えてきてこの頃よく聞く店長のこと
着信に浮かぶ片えくぼ 背もたれの助けを借りて笑い返した
追つていたボールを薄暮で見失うようなきみとの半年余り
よく來てたファミレス前ですれ違う自転車のぼく助手席のきみ

薄暮 雨虎俊實

53名
計
たへやんのじ参加
ありかとへやわこせやー。

織部ゆい	@yui_oribe	お似はうの	@hole46throw	おれけ	@mskpompompomfuwa23
歌島孟	@Sim1990	たえなかすず	@suzusuzu2009	御糸ね	@MEATsachi
花林なやな	@norl_usagi_san	多香子	@kareido1111	深影ムニハ	@Cotoha_Mikage
涸れ井戸		千原りほ	@kohagi_tw	水セ	@m_iya_o
河岸景都	@kate_kawagishi	梅雨すみれ	@tuyusumire	深山睦美	@57577_77575
かわはづ	@suikamikan_kawa	トマヌタ夏	@croissant Hey_Z	虫武一俊	@mushitake
北谷雪	@kitaya_misomiso	中村成志	@nakam8	村田一広	@mucci2022
あさぐれぬく	@Oyukimague	夏生薰	@kaorunatsuo	森内詩絵	@Njg4oE9g5glcRpU
碧乃やい	@hane_a022	君村類	@kmmr_r09	西淳子	@Jacky244Ray
麻倉ゆえ	@AsakuraYue	雲井ひろね	@hirune_k	西淳子	トマダジャック @jacksbeans2
雨虎俊實	@amefurash13107	くわいたか湖春	@Koharu_kura	袴田朱夏	@nakamada_shuka
石川順一	@Hitler57	高野蒔	@flour70percent	廣珍堂	@hakamada_shuka
石少山裏裏		桜やくわ	@tkuro2016	薄荷。	@aieOhimeco
宇井モナリ	@kijousan	西鎮	@wJ5f8NwfujJlVq3	りんか	@love_kei_ina
宇祖田都子	@Shinsyutu2020	西鎮	@xi_zhen_ivUT	橋本南美	@_nrkmm
泳一	@Fishimada	白石夜花	@yohana_no_sekai	福山桃歌	@momoka_fukuyama
hs	@hsweit	寿司村マイク	@saku_furui	古井 哲	@saku_furui
		寿司村マイク	@yohana_no_sekai	眞岡まな	@mao_or_mana



春の傘 夏の傘 秋の傘 冬の傘 わたしを 忘れて 行くな
街道に通行止めが現はれて夕橋わたるジテンシヤノムレ

立入禁止区域を突破すれば我等はプログラムかもしけず
なぜ我は此處にあるのかつかの間の^{ビッグバンとぶ}464億光年の中

皇帝の水族館に来るまでの旅の夜空の北斗七星

通勤の空にクジラの泳ぐ日も余裕がなくて会社に向かう
雨の日の静かな火山活動をワイングラスを回して見てる

戦の字の次に来る字ははつきりとまだ見えないがヤバい字がある

眠うぬ夜に

宇井モナミ

常世に生きているワタシ

歌島孟

この部屋の灯りを消せば星のない夜空としての最小単位
職質をされてみたくて線路沿い少し歩いたオリオンの下
ゆりかごのみどりごは母の眠る間にネバーランドへ誘われてる
ゆつくりと終電間近の遮断機は寝落ちみたいに首をおろした
マルチーズベビー căへと乗せられて夜の散歩へ運ばれてゆく
眠れない人の頭を飛び出した迷える羊を保護する仕事
シロナガスクジラの夢を見たという君の吐息に残る潮の香
夏はまた夜を短く刈り取つて世界を明るく見せかけている

犬という光

花林なづな

さびしさを分けあうように目が合ったペットショップの小さな子犬
いつのまにかわたしでなくて犬達が中心となるわたしの世界
人生が色づいてゆく犬達というあたたかい光がさして
年老いて病気になつても変わらない犬は可愛い赤ちゃんのまま
ぬくもりをこの手に記憶させる何度も犬の背中を撫でる
人生のことわり全て教わった死ぬ姿さえわたしに見せて
春生まれやんちゃな子犬がまた灯すこころの中の小さな灯り
はじまつた犬との長い散歩道わたしを照らす確かな光

ブラックコーヒー

河岸景都

これからは自力で夢を抜け出すの空のマグだけ傍らに置く
無理をした笑顔をやつと手放したブラックペがもう水になるころ
茶柱はあるの日が最後 幸福は帰れない家の棚に隠され
青春を四秒くらい取り戻す二酸化炭素を口に含んで
意味の無い歌詞を読み上げている声、水がずっとカラカラ歌う
浴びるほど砂糖が欲しいと会話するブラックコーヒーだけを飲みつつ
牛乳を横取りされた仔牛などいるはずもなく朝がまた来る
チューハイが酩酊をいま連れてくる簡単すぎる現実だった

白髭神社

涸れ井戸

ゲーム

かわはう

大雨を縫うように車は走り以前住んでた滋賀の家に
ドタバタの引越しで取りこぼしてた文庫ラックとネクタイと茶葉
妹の犬がバウバウ吠え続け濡れてる肩の乾きが早い
十年も住んでた家は廃屋と変わらぬくらい換装されて
実家にも居場所はなくて此処ももう棲み処ではなく雨は小降りに
窓枠に貼つた防風スパンジに犬の毛と綿埃降り積む
人生の残りはアディショナルタイム チタンで繼いだ頸椎で伸び
翌朝に雨は上がつて白髭の神社横目に京都に帰る

あの頃とポリゴン数が変わらない 川島教授は今日もぶかぶか
所々虹色に光つてる道路 余さず踏んで遅刻を回避
ピクミンで培つたこのダンドリを仕事でも活かせればいいのに
適当に置いたキリンがシーソーのようにゴリラを場外に飛ばす
Flash のサ終で一度と誰からも見つけて貰えないピクトさん
火は草に 草は水 水は火に強い そこから先は何も知らない
既婚者でも構わずアタックを仕掛ける 残酷なまでのトモコレのピュアさ
ゆつくりと右から流れる赤黒のボム兵仕分けて生きていきた

月の無い校舎屋上にはプール仙人掌ばかり浮かべる未来
屋上のプールは深く透き通る自転車までの息がもたない

インキ瓶へ振じれた光溶け合つて文通禁止の解かれざる国
文字は化石 貝殻溶かす光へと「鍵」と叫んでから飛び込んで
複雑な声は時折透き通り悟りのごとく流れるプール

千六百七十万色夥しい数の付箋紙もしくは嵐

終わりから時を数えよ従順な猿はフラスコへ閉じ込めて
教科書は捨ててパラソルチョコレート屋上以外全部がプール

バカみたく滅んでいった何もかも間違ばかりしてる気がする
文明に服をその都度すげ替えて写真にいつも一人、私は
かつて見た景色を騙る歴史書の中に、私の友の名は無い
囚われているのはあなた方 永久に消えないものを求め続けて
窓からの世界が全てだとしても、何を見るかは私が決める
庭があの頃と同じく華やいで、あなたの影が無い真昼時
いつまでも待てる時間があるのなら、いつかは会えるものなのですか？
時かける魔術以外は平凡な何度か会つたことのある人

ハムサンドまで

北谷雪

ばけもの

君村類

店先の雨を眺めて瓶詰めの珈琲豆たちみな大人しい

貧富にも幸福度にも関係ない苦味チャートに並ぶ産地は

落下する湯にやわらかく膨らんで受け入れるとは自愛の行為

つつがない夜へのまじないフィルターを店主は一、二、三回揺らす

客たちは息を潜めた共犯のようにそれが鳴り止むまでを

褐色の水位線を描き感情のうつわが熱を忘れ始める

溶け残るシユガーブのように何もかもエピローグには話せるだろう

薄いハムサンドでいまは満たされることは自分のための空腹

現在地

きまぐれおゆき

散策

雲井ひるね

ぼくたちの夕ぐれの旅 改札のこつちとあつちでおわるはじまる

くちびるにくちびるのせて漕ぎあつた順風なころ満帆なころ

タウマタファカタンギハンガコアウアオタマテアポカイフェヌアキタナタフ

身分証ばかり落としてかき分けるゴミかタカラか大盛貝塚

マンモスのスガワラビランジ横たえた白き瞳は永久に凍れり

ガラス製オーナメントが溶け出して現欧洲の軽い氷河期

心に帆をかけてこぎだす鹿児島県志布志市志布志町志布志

白黒に千切れた道を歩かされる青いひかりの許す間に

戸棚

くうだたけし

サザンワインド

桜さくら

水源を守る小さな神様が水遊びする裸のじじい

再生の夢を見ながら死に終える五分ののちのうどん兵衛

咲き終えたグラジオラスはだらしなく自分の名前もわかつちゃいない

伸びすぎたお隣りの木に伸びすぎたつもりはきっとないのだろうが

おめでたいことの記念のボールペンを雑な用途のときだけ使う

真つ暗な戸棚の隅に使いかけの賞味期限が切れた春雨

雨の日があまりに続く腹いせに赤くなるまで振る唐辛子

生えなくていい草がまた生えてきて梅雨が終わればまずは草取り

窓の水量

高野時

列

西鎮

目をあげてしまつたときは耳だけを真珠の色で覚えてほしい
顔のない海に漂うふたたびのわたしひとりを見つけてくれる?

硝子戸に初夏を待たせて晩年ひるまを拾うように話した

流れやすく汚すばかりの泥水はひととき青い鏡面になる

水田は窓の向こうで夕暮れのむらさきを呑む 泣かれてみたい
守られるわたしの棘は摩耗せず目をくれるなら目にもあるいは
鳥の名を知れば視界に鳥が来るよう渡してしまう領分
ぬかるみになる前は春の雨だった忘れられなくたつて変われる

くつがえすことのできない誤解にも似てかたくなに雨、六月の
ノブレス・オブリージュ もう誰ひとりまねかぬ庭に立つ月桂樹
はつ夏のフル・オン・ザ・ヒル 兄さんは笑ったときの涙がきれい
禁煙に失敗するたび先輩はすこしやさしい先輩になる
いい加減なぼくの欠片のような詩がときどきみに届くと聞いた
脳内に六角精児が棲んでいてときどき電車の旅へ出てゆく
あの夏にクラスみんなで始祖鳥とおもつたあれはなんだつたつけ
鳥だ、つて誰かが言つて足どりがやや軽くなる列でよかつた

猫の顔してないほうのロボットが客席間を働いている

お尻から横にずれつつ角丸の店内すみっこ広いソファーよ

コラボするキャラを知らない僕の見るコラボしてない普通のメニュー

包み焼きされるものはそれだけで美味しい味を連想させる

子どもむけメニュー開けば一面に青い耳なし猫型ロボット

パフェの日の6月28日にココスで食べたことがあります

もし推しができたらきっと連れてゆく傷のつかないアクリルスタンド

日曜の午後はショーンの店員を背に扉を押してから始まる

朝の陽に二つ目玉を光らせてあなた待ってるダイニングテーブル
気の利かぬ妻ではあるがわたくしは未だ夢見るシンデレラかも
自販機の前を横目で通り過ぎ、家に帰つて三ツ矢サイダー
素麺の冷たいひととき快くあとは昼寝の気ままなくらし
笛竹も売られぬ都市の豪雨の夜「七夕」ひとつ流れていった

折り紙の赤い金魚のモバイルを窓につるせば夕風が立つ
夢の中見えない鎖につながれて泣いてる私 早く目覚めて

わたしには似合わぬ都会のブランドに夕顔おおきく一輪咲きぬ

メロドラマ(つ)

たえなかすず

夏の底

千原こはぎ

うつせみのドトール重ねたカーディガン重ねた嘘をにぎり頬づえ
天球からはみだす、あふれる しあわせについてあなたはなぜか謝る
雨やどり電話ボックスこの世界果てから果てまでわたくしのもの
たどりつくパワースポット雨上がり感情の波いま四方から
将来と言うより未来、虹、かなあ アビージョばかり見つめてふたり
わたくしは歌人失格 魂の響きと字面が大嫌いなの
海の町、空の町から来たでしよう エスペンドリュが暗がりを蹴る
ブラインド越しの光が誘うからTシャツでゆこう湘南か死へ

あいかうせまで

ともえ夕夏

ペンギンに翼

西淳子

アイロンのいらぬシャツもいるシャツもひとしきそよぐ梅雨の晴れ間に
上を出せ上を出せとふひとのゐてわたしのうへに浮かぶ綿雲
おかしいな2キロも増えた100gのケーキ2個しか食べてないので
聞くまでもないしあはせな愚痴ばかり聞かされてゐる夜のサイゼで
結論を先に言へとふひとのゐて膨らまぬまま夜が終はりぬ
コサージュをつけても何ら特別なふうにはならなかつたわたくし
シスジエンダーだから疑ふわたくしがあなたを好きにならないことを
生活のせいかそれとも性格のせいかコンロの焦げが落ちない

鋼の絆 (#いろは鬼いちご)しりとり より)

中村成志

雨八首

袴田朱夏

雜踏に入道雲は湧きあがる ひとりで生きていくはずの街
この世から切り離されてはじめての店の窓から外を見ている
汗をかくアイスコーヒー きみといた夜の机の上の水滴
たぶん意味なんてない返信のないこともなんでもない 遠いだけ
この街にきみはいなくてこの街をどうしてすきになつていこうか
にわか雨 ありがと、翳りはじめてたわたくしにシンクロしてくれる空
もうなにもできそうにない夏の底ここから立ち上がることなども
水色はノスタルジック きみがいたいつかを反芻しつつゆく夏

ホムンクルスの紅と比べて人間の濁つた暗さ、だからこそ前へ
鍊成陣を溶いた卵で描く午後さあ生命よここへようこそ
練り上げたその掌を合わせ駆け巡る刃の疼きから瞳逸らすな
野良犬の額の傷の血走りの目の天を向くさざくれの、尾
不幸自慢の科白を競う時は過ぎ甲冑へ潜ませるなでしこ
禁忌に果てがあるなら絶対辿り着く 汽笛、発動機音、はつ冬
陽に焙られ砂に叩かれ後はまあ推して知るべし掌の紋様も
過ぎてゆく想いをかたちに変えた手へ長くて淡いキスを、終演。

あの雲の高さから落ちたにしてはやさしい雨だ さよなら、ディラン
無理すんな止まない雨はないけれど降らない雨もないんだからさ
とうめいな鶴になりたい 兩つぶをまとつたときにだけあらわれる
墜ちた子をかばうカラスとわたしとに雨は等しく停戦を告ぐ
散文では逃してしまう 雨の日にチーズケーキを焼くあたたかさ
あれは月、おでこには雨。こんなこと話せばきみはわらつてくれる
しばらくは生きるしかなく病棟にいる人たちと雨をさがした
戦争もガラスについていた雨粒もすべてが向こう側にすること

「太っちやう」「子どもは成長だよ」少し考えて「また成長しちゃう」くつぬげたトイレの紙がなくなつた「小学校どう?」「きょうも泣いたよ」ママ将来何になりたい?つくりたいなりたいものになれる世界をお迎えのインターフォンで部署を言う先生のまま走つてきたよ。まだ・みちお天才ぢやない?教科書のきやきゅきよの歌の音読のあとなんかいまいわたしじゃない土砂降りを歩く七歳の生きる基準(は)ーと(は)ーと(の)ばら(ひ)まわりおめでとう君が育てた君の感性隕石が落ちた日だつてきつとこう無防備を吹き飛ばす感動

たかいとーんと、ひくことーん。

薄荷。

なついろ

りんか

きらきらと騒ぐ波たち見おろして海の真上を飛んでくロケット
転がつて落ちてきそうに真ん丸な月を支える紅白鉄塔
真つ白な夏のひかりに照らされてゆつくりと目を開くひまわり
だんごむし道路のわきで生きていて完璧な丸が転がつている
パンプスの踵三回鳴らしたら新月の夜は空が賑やか
べたべたと鳴る床の音軽やかに裸足のふたりはふざけあつて
週末の疲れたからだを脱ぎすてた海月が泳ぐ白いバスタブ
浴槽の深いとこから眺めれば淡いクリーム色の天井

おおさかぐうし、十周年!

福山桃歌

眩しい

まさけ

十年分老いた指先 選び取る色は十年前と変わらず

もう二度と会わない人が夢に出てまぶしく見える生駒の稜線
窓ガラス越しになぞつた朝の街 満員電車にももう慣れた

ここにちは世界の国からここにちはゆめのしまにもさくらは咲いて
だいぶ語尾変わつたじやろお? そんなことないよつて言われたくて わざと
乗り換えももう迷わないからやかに歩くうめきたアンダーグラウンド
淀川を下つていけばふるさとにいつか着くからもう大丈夫
ハルカスが夕陽に染まりおしてや大阪暮らし十一年目

記憶の海

古井 朔

スーパー・バブルボブル

御糸さち

記憶の海溺れてボクら沈みゆく屈いだ水底セイレーンの歌声
やはらかに海月の骨を穿たれし君は知らない虚数の意義を

ゆるやかに流れゆく水底にいつしか積もる記憶の小石
思い出が剥製になる夏至の朝あのときもつと耳を澄ませば

赦すとか許さないとかどうでもいい今日咲いたあの花はいつ散るの
まどろみの島にて眠る花を摘み虚ろな短夜サティ聴く

思い出がタイムラプスのアルバムに消えては浮かぶ偽りの記憶の余韻
紫陽花の無限の前にうでをふり辿り着けない記憶の余韻

東雲のいる山の端にあらはれて北山今日も街を作りぬ
新米の看護師をぢつと先輩が待つ朝一番の忙しさ
おはやうのスタンプ跳ねて行き交ふも病棟すべて通話禁止で
あさぼらけ知らぬままなる朝ならば盆地の街は雨の庭なり
食パンとトマトの今朝の仲違ひオリーブオイルが宥めにはひる

定期券見せステップをしゆつと降るる女生徒が開く水玉の傘
朝六時採血のワゴン押す音と眼れぬ夜を過ごしし患者
北山は昨日の夏日忘れしや東雲の影窓に映して

風そより木木がざわめきほのかなる隠したこころ飛ばされそうに
薄雲がわたしのほうに近づいて蚕の糸がわたしを包む
雨だれを叢雲たちがなぐさめるわたしの糸にきらり、希望が
グラウンドをゲリラ豪雨が抱きこんで稻妻うつす きみの横顔
雨上がりきみの足跡にかさねてる 歩幅がずれる、わたしはここよ
あと少しきみのもとまで追いつけば搖れるリボンのセーラー熱く
ぶりむいたきみの目の先にいるわたし吐息の粒が雲になつてく
思い出す。あなたが知らぬ青春の夏の葉がはらりと落ちて

溜め息を撒いて歩いて目を覆うほどに眩しい職場のセブン
広角をあげて笑顔で柔らかくクレームを言う人が嫌いだ
ありがとうございませんを隠せずに片手で受け取る二千円札
おまえもな疲れてるだろキャッシャーのお釣りトレイのプチプチのプチ
早朝にひとり並べるあんばんが未だ話して来ようとしない
ゴミを出す 黄色い花が咲いたのか また撒いているぼくの溜め息
今からはここは異国だミヨーさんと王さんがする明るい笑顔
夜よりも光るセブンをあとにしてモーニングせかい、おやすみなさい。

平服とは何かを決める審判が行われているクローゼットで
妍しいものははずつしり重たくて結い上げた髪も金の刺繡も
はつ夏の紫外線にはご用心目に見えない傷みにご用心

まだドレスの色に強さを借りていて黒は私に似合わない色
壁に咲く紫陽花みたい群衆として青にも紅にもなれる人たち
シャンパンの泡のリズムはスタッカートあなたと指が触れ合う手前
もう少し昼間の顔をしていてね小指のアレキサンドライトよ
特別な一日になるにはまだ遠く少し踊つてみる夏の宵

そんなのが許されるならなんだってできる気がした イエーベ オースズメ
お互いに助けあえればいいのにね万引きGメンGメンGメン
棺桶に入れられないもの一覧に生き物とある暮れの火葬場
すみませーん！降りまーす！と言つていこう渋谷駅でも生きるべきでも
裸だと気づいた後の王様は裸の定義を変えようとした

本当に食事のときも寝るときも検討し続けててたら、どうする

騙るものごと

水也

とりどりの信仰より選び摘んだいとしいひとの悌おもかげを見る
うそつきに甘いくりいむまとさせて美味しくいただいた残りもの
魂の重ざぶんだけ口にする熱い紅茶をひとりぼっちで
身を削いだあこがれにいる、今、わたし消えてしまつてもいいかもつて
丈夫 いつわりでもね大丈夫つて言うだけで傷ついていく
青白いほのおがゆれている夜に月は落ちてく湖の底
空白を仰ぎ見るよう綴られた物語の終わりは知らない
密室はすべてひらかれたあとから閉じられている幻想のなか

力ステラにはザラメ

村田一広

身綺麗にせざらば餌も貰へまい野良猫はせつせと身繕ひ
温泉に一瓶のシャンプー落としたら泡が湯船を覆つてしまふ
(今のところもう一度再生してください) 車窓よぎりし青き人影
細き脚剥いたところでほぼ肉のあらざりし五百円のずわい蟹
密封をされし食パン外袋とレジ袋濡れてもパンはそのまま
カステラがカステラとしてあるためにべとべと感の絶えぬ指先
この店のモンブラン買はうか口コミでは栗ぢやなくさつま芋の味と
紅の薔薇の花びら白粥に散らして病回復の気配

紫陽花を見にいきましょう

森内詩紋

アガヴェ

れいあむ

カーテンは緑むこうに赤い薔薇 カツコウカツコウ 六月の朝
紫陽花を見にいきましょう夏蕎麦も美味しい季節 今日は「旅」です
ええ、そうですあれが母校である寺の裏に親父がねむっています
どうかなあ 十年くらい前まではここが地元な気がしてたけど
575さらに77うん少し長めなんです短歌つてのは
「うた」なんてわからなくつていいんです心がふるりと揺れたらそれで
プロジェクト成功しますよ先輩が手を抜かないの知つてますから
夕暮れに祈る小さなこの旅が明日の支えになりますように

青森

ヨシダジャック

青い森鉄道線で一度きりりんごの花とすれ違ったり

鳥籠にもきっと春は来るとうたいつづけるさくら祭りのこどもたち
行き先のないぐるつとバスから実在の寺山修司記念館見ゆ

きみはいい子になつた褒美としてきみになつたのか おとうとの椅子子
わかるのは鳥のことだけそう言つてあなたはくり返しきり返しりんごを洗う

月曜の朝というのにおどうとの机も椅子も捻れていよい

とても素敵な話でねといふように鳥は歌えり空くらかりき
こんなりんごは見たことないよと少女らはバカでかい銀色のコルトで

「雲」

テーマ詠



羽ばたいて雲の果^はたてに飛び込めばあなたのもとへ降れるでしょうか

太陽に素直な雲の横顔を見上げて反つたうなじが焼ける

哀しさ悔しさ寂しさ愛しさのどれを選ぼう 雲が過ぎゆく

岩倉は晴れて居るのに遙か東紫の雲の固まりがある

空欄を埋めよと命じる問四を入道雲でいっぱいにする

口噤み雲の動画を切り刻むスマートフォンが船になるまで

国道を走る雨雲より早く君と会うため声を聞くため

雲がゆく空の境をみきわめてどこから宇宙どこからが天

氣まぐれな雲は形を変えながら大丈夫と涙を拭う

未来から来たんだよって嘘をついて、あなたは遠い雲を見ている

頼りないわたしのことが心配でたまに出てくる犬形の雲

◆ 芙林なづな

◆ 歌島孟

◆ 織部ゆい

◆ 涵れ井戸

◆ 河岸景都

◆ 北谷雪

◆ 君村類

◆ 雲井ひろね

◆ くうたか湖春

◆ 西鎮

◆ 白石夜花

◆ 空似ほうる

◆ たえなかすず

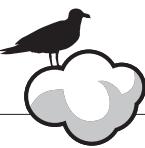
◆ 千原こはぎ

君に似て僕を無邪気に振り回す真夏の空の雲の輪郭

月一のチートデイにはひつそりと茹でる雲呑食べる仙人

夏・近視・心変わりのせいにして中央道の上に雨雲

きみといふ時間を梅雨にしてしまう 雲ばかり吐き出してたせいで



テーマ詠 「雲」

退院が決まり自宅へ帰る義父雨雲低くこれからのこと

梅雨すみれ

空欄は空のわりには小さくて好きなかたちの雲が描けない

ともえ夕夏

飛行機雲つてつまりは排気ガス 西で紅と藍とが争う空の

中村成志

泳げないわたしのためにオオルリよ雲海高くあの朝へ啼け

夏生薰

ベンギンがジェット機みたいに飛んじゃつて、そいつのおならで飛行機雲じやん

西淳子

雨雲のレーダーにらむ丸腰のわれと二歳を濡らさぬように

袴田朱夏

遠足と授業の用意を持つていく重さをわたしのせいにされても

橋本南美

少しだけ雲の切れ間とあの人を待ちわびて待ちわびて雨だれ

薄荷。

禅寺へ雲の如くに龍は降り梅雨の深さの警策を打つ

廣珍堂

塗り重ねるゴツホのような雲つつむ恥ずかしがりの月のおくるみ

りんか

雲一つない八月の空のもと俯いている影の短さ

福山桃歌

純白をめざしつときに空を裂き光の輪のなか世界をうつせり

◆ 古井 朔

雨雲にせかされ急ぐ自転車のペダルにネズミがグルグル走る

◆ 真岡まな

雲間から射した光に清められわずかに顔を上げた紫陽花

◆ まさけ

スカイツリーは雲の深さを知る定規 藏前橋からしばし眺める

◆ 御糸さち

真っ白のまま ~~は~~ にした物語うろこ雲もつとちぎれてしまえ

◆ 深影コトハ

流れでく雲の速さに目をみはるあしたの気配背中をたたく

◆ 水也

暗いだけで雲が終わつてつまらない逆転負けに濡れられもせず

◆ 虫武一俊

曇り空のもとに目覚めし夕顔は夕陽も見ずに生を終へにき
少年は歯を食いしばり駆けていく夏雲に盗られそうなその影
大好きなものならみんなはこづめにすればいいのよ雲とかもはこづめ
衝天のアガヴェの花の咲くを待つ夕焼雲と人の背の波

◆ 森内詩紋

◆ ヨシダジャック

◆ れいあむ

一首評

そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

ほっこりいき まちがい・さがし

短歌で
テーマ歌から拝借した
短歌をもとに描いた
イラストの中に
10個のまちがいが
あります
見つけられるかな?

tanka



大好きなものならみんなは一づめにすればいいのよ雲とかもは一づめ

ヨシダジャック

ほんとうはひとつ入り江としてひらく
こころを持つてうまれたはずだ

連作「生存確認」の六首目。五首目「海流の果てに
形成されていく砂州に似ている言葉の上に立つ」と
対になる歌であろう。単独で読めば何處となく爽快
な「入り江」の比喩は、歌意に合わせて上記の歌を
踏まえることで、主体の、自己の現状に対する不満
や不安をやわらかく読者に伝えるためのキーフレー
ズとして効いている。散在する「う」音はそれを裏打ち
しているようにも思える。

君村類

ほんとうはひとつ入り江としてひらく
こころを持つてうまれたはずだ

猫をよけ猫をまたいで月淡き猫街道をた
どつてわが家

村田一広

いろいろと想像する一首。「よけ」「またいで」とい
う言葉から、主人公は猫があまり好きではないのか、
と思う。その反面、「月淡き」つまり薄暗い道で、例
えば走つてくる自転車や転がっている空き缶がすべ
て猫に見えてしまうのだとしたら、病的なほど猫
好きとも読める。「わが家」へ帰るのに、わざわざそ
んな道筋を選んでいるのか、とも。「よけ」「またいで」
「わが」とひらがなに開くことで、堅苦しさを避けて
いる。

西鎮

奈良を詠んだ八首、お水取りから鹿煎餅まで春の吟
行から生まれた歌などの歌も早春のやわらかな
空気が吹き込まれたように心地よい。こんな歌がで
きるのはきっととてもなく愉快い吟行だったのだ
ろう。羨望。引用したのは八首目、ひときわ甘く美
しい歌で連作が閉じられる。閉じると同時にやがて
編まれるだろう歌集に向かってひらかれてゆく。甘
美にすぎるということはない。早春の奈良はそのつ
くら甘く美しいのである。

ヨシダジャック

リラの香の薄様がいい いつの日かひそ
やかに詠む春の歌集は

桜さくら

「そらよみ」一首評募集

ご投稿はこちらの
投稿フォームから!



前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、
その歌について200文字以内でお書きください。
お一人につき一首まで。
ご自分の短歌ではなく、他の方の作品をお願いいたします。
公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような
投稿は掲載できませんのでご注意ください。

望遠鏡

21

短歌にまつわるあれこれについて
自由さままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…



石村まい

書き手

テーマ 「ひらきたい」?

短歌を詠んだり、読んだりしていると、文字のひらき方にについて考えさせられる場面に遭遇する。歌会などでは特に、より良い改作案として、「ここは漢字のほうが」「いや、ひらがなのほうが」といった意見を交わすことしばしば。大抵の場合、作者には意図がある文字をひらいたりひらかなかつたりしてい

うすべにの湯呑みふたつを重ねおく君のにせもの来そうな日暮れ

／服部真里子『遠くの敵や硝子を』

「薄紅」ではなく「うすべに」。漢字であれば、きつちりとその色が色として提示されるような気がするが、「うすべに」には、色がのつたりと伸びてゆくような感覚がある。そこから、

てそのように作っている歌が多い。そして、あえて漢字を少なくした歌に対しても、この箇所は漢字にしたほうが……などと思い及ぶことはあまりない。要するに根本的な好みのようなものがあつて、わたしは「ひらきたい」側なのだと思う。なぜ「ひらきたい」のだろう? ひらがなのもつイメージと、詠みたい歌や好きな歌の情景がどことなくリンクしているからだろうか。ふつう漢字を使用しそうな文字をひらくと、余白を感じられ、ゆつたりとしたやわらかな雰囲気が出る。また、初句をあえてひらがなにすることで、読者に立ち止まらせ、印象づける効果もあるようを感じられる。

ほかにひらく理由としては、前後の表記が漢字である場合、漢字同士がくつついて読みにくくなったり、やや詰まりすぎた印象を与えていたりするのを防ぐこと、というのがあるだろう。韻律の文学であるからこそ、文字目でなぞるときのみならず、声に出して読むと要である。逆に、意識的に漢字を多くすることでも、硬質なイメージを歌全体にもたせることが可能だ。と、普段からふかく考えているわけではないのだが、あらためて文字のひらき方を踏まえて作歌や鑑賞をすると、また違った角度から歌を楽しめるのではないかと思う。



ヨコのかぎ★

- 4 月ひと夜ふた夜満ちつつ
厨房にむりッむりッと
○○○○芽吹く
／小島ゆかり
- 6 内臓脂肪が気になる方は
これで定期的な測定を…
- 10 今日の次の日
- 11 「it is」または「it has」の省略形
- 15 自分の利益だけを追求するさま。○○的。
- 16 とびやすき○○○の汁で汚すなけれ虐られし少年の詩を／寺山修司
- 18 剣術家、二刀流の元祖。宮本○○○。
- 20 ○○も実力のうち
- 21 フィルターで濾すこと
- 22 三角の帆をはつた風で進む小型の船
- 26 馬が引く乗り物。かばちゃん製も…?
- 27 牛と対決するのが仕事
- 30 日本人の主食
- 31 おじいさんとおばあさんと孫と犬と猫とねずみがひっかかる野菜
- 32 毛の生えている具合
- 33 いちばんはじめ
- 35 二人が向かい合っている状態
- 36 これが出来るならマスクは必須です
- 37 薬として用いること

タテのかぎ★

- 1 新しく事を起こすこと
- 2 痛めると大変。お尻の上あたり。
- 3 ありとあらゆる味のある筒状のスナック菓子「うまい○○」
- 4 脚から腰まで一体の靴下のこと
- 5 僕の手にもう生傷がないことで子○○が○○になったと気づく／仁尾智
- 7 座るもの
- 8 ご先祖が帰ってくるとされる時期
- 9 少しでも明るい人になりたくて○○○○○○を取り替えている／宇野なづき
- 12 四万十に光の○○をまきながら川面をなでる風の手のひら／俵万智
- 13 陰と○○。○○キャ。
- 14 雨降りに必須
- 17 風水害を防ぐために、川岸に土を積み上げて築いた堤
- 18 昔からの言い伝え。寓話。
- 19 ○○を捨てよ、町へ出よう
- 21 王様の耳は○○の耳
- 23 通勤している会社のことです
- 24 病気・けがなどが治ること
- 25 レーズン
- 28 首都はアテネ
- 29 蛆が成虫になり羽がはえること
- 32 今日の朝
- 34 欲しいと思う気持ち





#うたそら

「うたそら」ではTwitter(現X)でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

第22号

連作欄 8首の連作自由詠
テーマ詠欄 「夜」
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集中



第22号 メモリ 24 8/31(土) 24時
•8首の連作自由詠 •テーマ詠「夜」1首

第23号 メモリ 24 10/31(木) 24時
•8首の連作自由詠 •テーマ詠「星」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

今年もあつという間に半分が終わる、七月がやつてきました。梅雨入りが遅かったこともあり、毎日よく雨が降りますね。すつきりと晴れた空が嬉しいですが、今年の夏はかなり暑くなるとのこと。皆さま体調にはくれぐれも気をつけてくださいね。

今号もたくさんの方の作品をお寄せいただきました。ページ数の都合で关口カードやまちがいさがしながら用意しています。短歌作品とあって楽しんでいただければ幸いです。次号は9月発行、テーマ詠のお題は「夜」です。秋の夜長にゆっくりと味わえるような、すてきな作品をお待ちしております。

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら

第21号

参加歌人様 53名

連作欄 41名

テーマ詠欄 44名

一首評 3名

コラム 石村まいさん

エッセイ 雨月茄子春さん

第21号

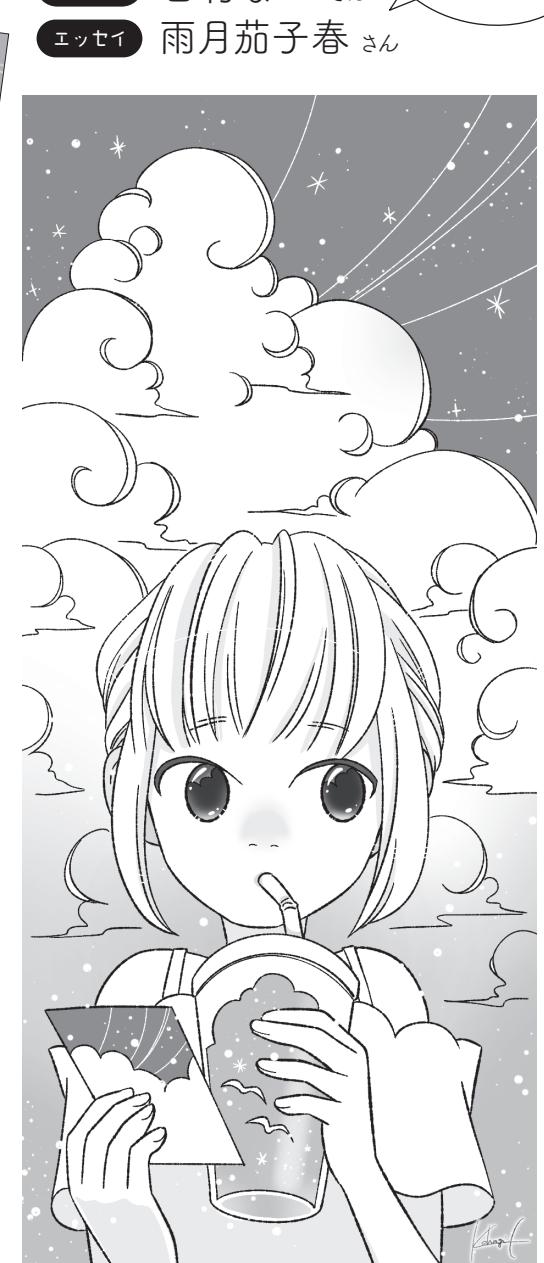
ご寄稿いただき
ありがとうございました!

illustration: kohagi chihara

僕の部屋はサイコー。アイシールドが全巻ある。窓を開ければ柔軟剤のいい匂い。アパートの二階、角部屋。隣にコインランドリー。挨拶したらそうめんくれた素敵なおばちゃんも、サイコー。

僕の最近は懊惱 (Oh, no! 笑)。きみの最近はどうよー? (最後から十年くらい経つてんね!) 僕の二〇一四年は恋にバンドに大忙し。……なんてね。でも、ときどきは短歌も書いてるよ。

大学どうしよう、って思う。休学寄りの強い気持ち。まるでゴリアテ。いつもできたて。

電信柱本気で蹴つたら折れるつしょみみたいに軽くてマジの気持ちだ

雨月茄子春



友だちができる、それはたとえば同年代。夜、公園で人生の話をして、深まる。「深まる」は長谷川鱗からもらったキーワード。深まるって嬉しい。奈良シカマルは賢い。ミジユマルはいじっぱり。ガジュマルは絞め殺し↑打つ手なし泣ていうかビジネス陽キャつて何だよ!

それで、人生の話。深まったあと、デカい時間が見えて困惑。家とか、車とか、子育てとか? 子どもほしいって思う日、ある。ピュアに。だって僕らの子つてサイコー。どうなつたつてサイコー。子どももって何人いたつていいかも。僕は子どもが大好き。僕の無責任な気持ち。気持ちは全部比喩になる。比喩の中で、言葉は全部本物を超える。フリスビーめっちゃ投げよう。宇宙船すべり台のある公園でお喋りしよう。そうそう、ベテルギウスって消えちゃうかもしねないんだって。ほんとかな。超新星爆発! カラの再会!?

Be in love with you! (生きてることって光だね!)

だから、きみの最近はどう? 癖つ毛はまだもさもさしてる? 答案用紙はまだ白紙? なんだん記憶が薄れていくのが、僕はまだ嬉しいと思えないよ!

リレーエッセイ
いちごいちえ

21



前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

光

雨月茄子春

僕の収入は3万。家賃も3万。イーブン、むしろマイナス。だけどサイコー。ちやけばヤバたん?

友だちができる、それはたとえば同年代。夜、公園で人生の話をして、深まる。「深まる」は長谷川鱗からもらったキーワード。深まるって嬉しい。奈良シカマルは賢い。ミジユマルはいじっぱり。ガジュマルは絞め殺し↑打つ手なし泣ていうかビジネス陽キャつて何だよ!

右手の甲と左足の裏を蚊に刺されて、でも友だちができる、それはたとえば同年代。夜、公園で人生の話をして、深まる。「深まる」は長谷川鱗からもらったキーワード。深まるって嬉しい。奈良シカマルは賢い。ミジユマルはいじっぱり。ガジュマルは絞め殺し↑打つ手なし泣ていうかビジネス陽キャつて何だよ!

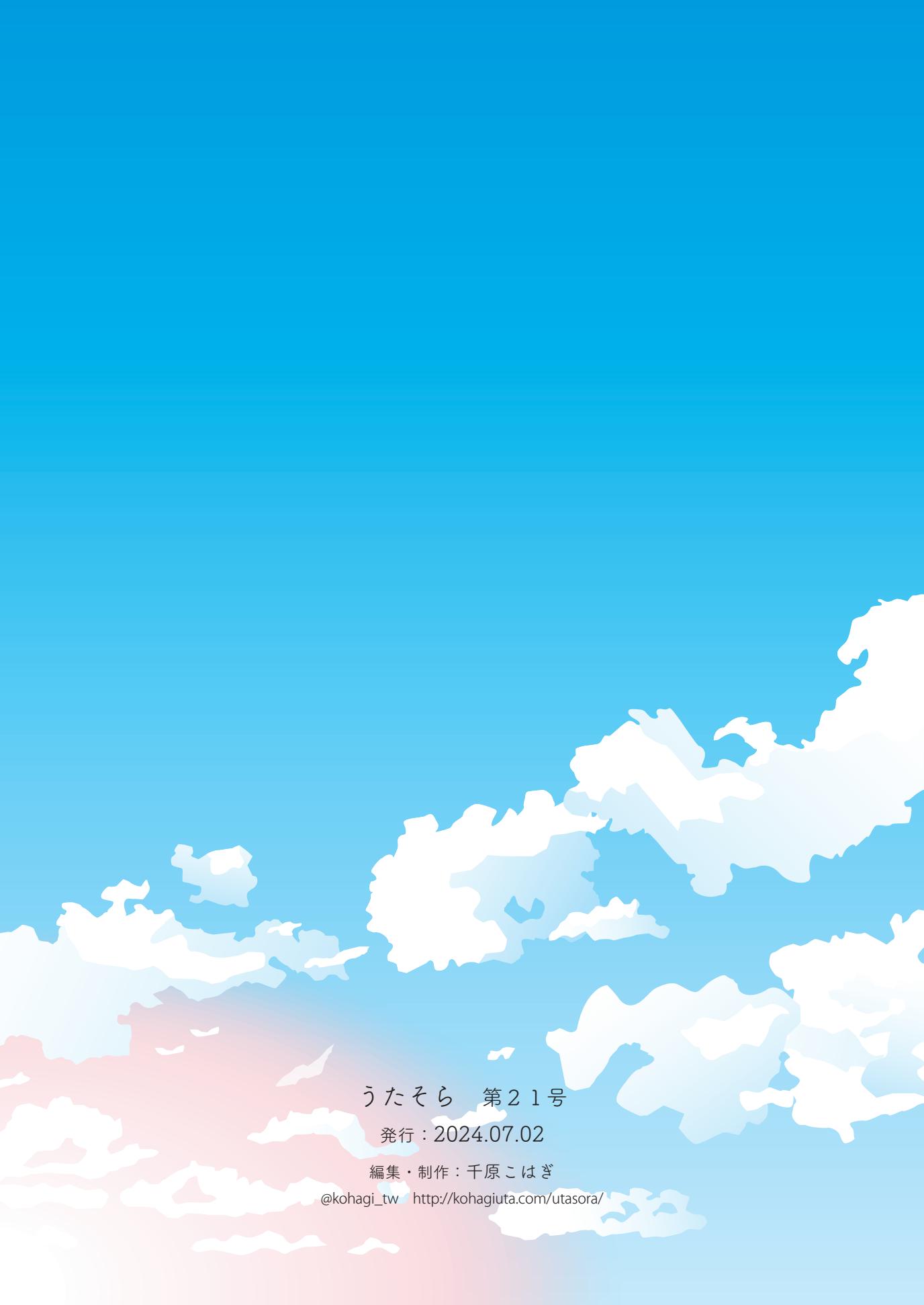
それで、人生の話。深まったあと、デカい時間が見えて困惑。家とか、車とか、子育てとか? 子どもほしいって思う日、ある。ピュアに。だって僕らの子つてサイコー。どうなつたつてサイコー。子どももって何人いたつていいかも。僕は子どもが大好き。僕の無責任な気持ち。気持ちは全部比喩になる。比喩の中で、言葉は全部本物を超える。フリスビーめっちゃ投げよう。宇宙船すべり台のある公園でお喋りしよう。そうそう、ベテルギウスって消えちゃうかもしねないんだって。ほんとかな。超新星爆発! カラの再会!?

Be in love with you! (生きてることって光だね!)

僕は額縁の全裸! テーマパークの廃墟! 進化するデビルバットゴースト! デビルバットダイブ!

僕は額縁の全裸! テーマパークの廃墟! 進化するデビルバットゴースト! デビルバットダイブ!

ね、これから負ける気がしないって感じ。



うたそら 第21号

発行：2024.07.02

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>